河野鉄兜の四国・中国旅行の旅程について——その再構成の試み

田村祐之

筆者は以前、河野鉄兜の四国・中国・九州旅行について、鉄兜が残した詩文および彼が交流した人々の残した詩文などから、その一部の旅程を再構成してみた[一]。刊行後、執筆当時は未見だった資料をいくつか見る機会に恵まれ、鉄兜の旅程をより明確にすることができるようになった[二]。それと同時に、鉄兜の子、河野天瑞の「河野鉄兜伝」に記された旅程に疑問を抱くようになってきた。本稿では、鉄兜の四国・中国・九州旅行の旅程のうち、とくに前半の四国・中国旅行について、新たな知見を取り入れて、「河野鉄兜伝」[三]に記された旅程と比較検討しつつ、再構成してみたい。

一、河野鉄兜の略歴および「河野鉄兜伝」に記された鉄兜の旅程

鉄兜の子、河野天瑞の「河野鉄兜伝」によれば、河野鉄兜（文政八〔一八二五〕～慶応三〔一八六七〕）、本名は羆または維羆、字は夢吉、号は鉄兜・秀野・錦壇・祝田など。揖東郡網干町（現兵庫県姫路市網干区）で生まれ、七歳から読書を始める。十五歳の時に、一晩で詩百首を作ったという。十九歳で姫路藩の仁寿山校に入学するが、一年ほどで退学。二十一歳の時に揖西郡伊津村（現兵庫県たつの市御津町）で医師を開業。嘉永元年（一八四八）、二十四歳のとき、名流文人との交流を目的として江戸に旅行、翌年帰郷。その後家塾を開く。嘉永五年（一八五二）、林田藩主建部政和から藩校敬業館教授に招請される。そのとき、教授就任の条件として、鉄兜は以下の条件を出したという。

一、一応出仕はするが、二三年間中国九州と漫遊する事、及び帰国後まで家を移さぬ事。
二、住居を郭外に置き私塾を設け、且四方漫遊の士と自由に交通する事。
三、母の存命中は毎月一回定省の事。（以上「河野鉄兜伝」による）

これが認められたので、鉄兜は教授就任を承諾した。

さて「二三年間中国九州と漫遊する事」について、「河野鉄兜伝」によれば鉄兜は『雲鶴日程』という遊記を編んだというが、該書は現在のところ所在不明である。「河野鉄兜伝」に、『雲鶴日程』によったと思しき旅程および交友が記されており、それによれば、鉄兜は嘉永五年（一八五二）九月に伊予の今治に渡り、先祖の遺蹤を尋ねる。そして金毘羅宮を詣で、榎井村、丸亀を経て、大阪に向かう。近傍の名勝を巡りつつ、大阪で年を越し、嘉永六年（一八五三）三月から西下をはじめ、各地の文人と交流しつつ備後藤江に至る。そこで母親の病の知らせを受け急遽帰省するが、母親はほどなく快癒したので旅行を再開、備後、芸州、防州を経て、八月に下関に到着。下関から小倉に渡り、稗田、中津などを経て日田に至り、久留米、佐賀などを経て長崎に至る。長崎から諫早、島原、海路にて熊本に渡り、再び日田を訪れ、しばらく滞留してから小倉を経て帰郷している。「河野鉄兜伝」によれば、このとき各地で詩を詠み、それを詩草に編んだというが、それら詩草も現在見ることはできない。ただ、それらの詩の一部は、天瑞が編集した『鉄兜遺稿』に収められているとみられる。『鉄兜遺稿』は、生涯に数千首も詠んだという[四]鉄兜の詩から七百四十三首を選び、古詩・律詩と絶句の二巻に分けて編んでいる。また鉄兜と交流のあった文人たちから寄せられた詩文をまとめ、『鉄兜遺稿附録』として付している。

以下に、「河野鉄兜伝」に見える、鉄兜が経由した地とそこで交流した人々、および『鉄兜遺稿』所載の、その地で詠まれたと思われる詩を一覧にする。経由地の現在の地名をカッコ内に、交流した人々をその下に示し、その地で詠まれたと思われる詩がある場合は、題と『鉄兜遺稿』の巻葉を示す[五]。なお「河野鉄兜伝」に載せる地名・人名には誤植と思われる部分が散見されるため、ここではできる限り正しいと思われる地名・人名に直して載せる。また、「河野鉄兜伝」に言及がなくとも、『鉄兜遺稿』に載せる詩で、この旅行時に詠まれたと思われるものがあるときは、地名を〔　〕で表示して記す。

1　四国

①今治（愛媛県今治市）

②榎井村（香川県仲多度郡琴平町榎井）日柳燕石

「柳士煥呑象樓」（巻上十三葉表）

③丸亀（香川県丸亀市）吉田鶴仙、尾池松湾、田岡栗軒

「送田岡夢弼」（巻上四十七葉表）

2　関西

①大阪（大阪府大阪市）広瀬旭荘、柴秋邨

「遊箕面山　次旭窓舊題韻」（巻上四十六葉表）

「舟下神崎川　賦寄卜陽兄弟」（巻上四十八葉表）

「夜入浪華」（巻下二十三葉裏）

「浪華雑詩」（巻下五十九葉表）

「勝鬘院」（巻下六十一葉表）

②京都（京都府京都市）頼三樹三郎

「澱江舟中」（巻上一葉裏）

「京師客中」（巻上四十八葉裏）

「入京」（巻上五十二葉表）

「京寓雑詩」（巻下三十三葉表）

「鴨東　似中西耕石」（巻下五十六葉表）

3　中国

①岡山（岡山県岡山市）伊藤疲石、堀清右ヱ門、西達三郎、姫井孝之助、万波時次郎

「犀載寺　遇不奪」（巻上四十四葉裏）

「岡山客舎　謝武井元卿至　疊前日韻　時雨甚」（巻上四十四葉裏）

〔倉敷〕（岡山県倉敷市）岡山素（おかさんそ）
「投岡山素家　席上賦贈」（巻上三葉表）
〔玉島〕（岡山県倉敷市玉島）
「玉島客舍　觀中國華來賓簿　首有梁星巖名字　感而作此　寄翁於京師」（巻上三葉裏）
②高梁（岡山県高梁市）山田方谷（ほうこく）、三島中洲（ちゅうしゅう）、林富太郎（はやしとみたろう）、進昌一郎（しんしょういちろう）、板倉圭
③江原（岡山県井原市）江木鰐水（えぎがくすい）、浜野箕山（はまのきざん）、阪谷朗廬（さかたにろうろ）
「晉戈席上　同今村絲井岡本諸子賦」（巻上五十七葉表）
「送江木晉戈東役」（巻上二十九葉裏）
「舟過箕島　懷濱野以寧（以寧時伊勢）」（巻下四十一葉裏）
「朗廬歌　阪谷子絢囑」（巻上二十八葉表）
「柳陰春釣圖　子絢索」（巻上二十八葉裏）
〔神辺〕（広島県福山市神辺町）菅自牧斎（かんじぼくさい）
「神邊驛　訪菅昭叔　有詩　次韻」（巻上六十三葉裏）
〔鴨方〕（岡山県浅口市鴨方町）
「備中道中　有懷西山先生」（巻上二十七葉裏）
〔笠岡〕（岡山県笠岡市）小寺完之（こてらかんし）
「笠岡訪小寺子先　不在」（巻上四葉表）
④藤江（広島県福山市藤江町）山路機谷（やまじきこく）
「山路伯美所藏石　形質甚奇　余為命曰小崆峒　因舉席上談　任筆為韻語　總一百三十八押　自酉至丑而成」（巻上五葉表）
「白雪樓歌　為伯美作」（巻上二十九葉裏）
「對仙醉樓詩　用廣瀬旭莊韻」（巻上三十葉裏）
「和伯美作　十首」（巻上五十五葉裏）

「赤壁集字詩　同伯美莞爾」（巻上五十六葉裏）
「對潮樓　贈子恭」（巻上五十七葉裏）
「福禅寺寓居　次棕隠翁韻而作　十首」（同）
「落花　次長戸得齋韻　同伯美」（巻上五十九葉裏）
「將發鞆津　諸子餞飲於三山亭　分得亭字」（巻上六十葉表）
「浦崎」（巻下三葉表）
「甲寅元旦仙興」（巻下四十一葉表）
⑤松永（広島県福山市松永町）高橋西山、桑田莞爾
「待鶴樓詩　為桑田莞爾賦」（巻上九葉表）
「次子潔見贈韻」（巻上五十六葉裏）
「荅子潔問詩法」（巻下四十葉表）
⑥尾道（広島県尾道市）福原謙斎、西方寺慈潤、橋本竹下
⑦広島（広島県広島市）木原慎斎、頼聿庵
⑧岩国（広島県岩国市）玉乃世履、二宮元輔、塩谷雲平
⑨遠崎（山口県柳井市遠崎）妙円寺月性
⑩徳山（山口県徳山市）福山要蔵
⑪長府（山口県下関市長府）臼杵駿平、国島俊蔵、結城順輔
⑫清末（山口県下関市清末）村上文吉
⑬下関（山口県下関市）河野藤右衛門・亀太郎

4　九州

①小倉（福岡県北九州市小倉）西元礼一郎
②稗田（福岡県行橋市上稗田）村上仏山
「佛山樓席上　雑贈」（巻上六十葉表）

③薬師寺（福岡県豊前市薬師寺）恒遠醒窓
④中津（大分県中津市）八条半坡、津田半蔵、藤本元泰
⑤後藤寺（福岡県田川市奈良三井後藤寺）後藤素一
⑥日田（大分県日田市）広瀬淡窓
「客踪」（巻下四十五葉表）
⑦久留米（福岡県久留米市）本荘星川・適処、山本君山、和田一平、後藤半蔵
⑧柳川（福岡県柳川市）岡直三郎
⑨蓮池（佐賀県佐賀市蓮池町）大野梁村、水野約斎、斎藤竹斎
⑩佐賀（佐賀県佐賀市）草場珮川、枝吉神陽、武富圯南、大園梅屋、相良鷹堂、古賀素堂
「贈佩川翁　湖珠別函詩韻」（巻上六十二葉裏）
「佩川墨竹」（巻下十二葉表）
⑪多久（佐賀県多久市）草場船山、西鼓岳、鶴田鶴陰、徳永桐陰、野田藍浦
「同多久諸君　游桐野　次立大韻」（巻上六十一葉表）
〔北方〕（佐賀県武雄市北方町）
「北方客舎　次立大韻以別」（巻上六十一葉表）
⑫武雄（佐賀県武雄市）立野桂山、山口又吉郎
⑬大村（長崎県大村市）片山龍三郎、福田頼三
⑭長崎（長崎県長崎市）頼川藤三郎、高島晴城、山本晴海、後藤外浦、春徳寺鉄翁、木下逸雲、三浦梧門、福地石橋
⑮諫早（長崎県諫早市）本多豁堂、福田渭水、西村光江、田川華岳、年田石香
「聚奎樓十勝　福田渭水囑」（巻下五葉表）
⑯平戸（長崎県平戸市）佐々孚嘉
⑰熊本（熊本県熊本市）木下韓村、横井小楠、中川南川、深水玄門、町野玄叔、村井玄蔵、応元朴、沢村宮門
⑱阿蘇（熊本県阿蘇市）大宮司阿蘇惟治

※日田再訪

⑲甘木（福岡県朝倉市甘木）佐野東庵、和円荷庵

⑳秋月（福岡県朝倉市秋月）吉田平陽、中島衡平、伊藤良六

㉑山家（福岡県筑紫野市山家）原采蘋（さいひん）

「贈采蘋女史」（巻下五十四葉裏）

㉒大宰府（福岡県太宰府市）延寿王院、田島徳三郎

「宰府路上　望天拜山」（巻下四十五葉表）

㉓博多（福岡県福岡市博多区）大賀半農、河島養林、中村春窓、石丸春牛、松永遥岩

㉔福岡（福岡県福岡市）臼井茗圃、大山雨香、櫛田俊平、亀井鉄次

※小倉から下関に渡り帰郷

鉄兜が最初に向かった伊予の今治は、先祖である伊予河野氏がかつて守護として治めていた地域であり、遺蹤探訪が目的であった。「河野鉄兜伝」によれば、鉄兜の祖先、河野氏は本姓を越智といい、もと伊予一国を領有する守護大名であった。しかし家督争いや周辺の諸大名との争いにより弱体化し、豊臣秀吉の四国攻め（天正十三年〔一五八五〕）のときに豊臣側の小早川隆景の説得を受け、当時の河野家当主通直は降伏開城、このとき河野氏の一族は瀬戸内海を挟んだ対岸に落ち延びて行った。通直の弟通房は播州印南郡宇佐崎（現兵庫県姫路市白浜町）に落ち延び、この地で塩田を開拓して生計を立てた。その後一度断絶したものの、縁のあった衣笠氏から養子を迎え入れて復興した。この時養子に入った孝章（三省に改名）が鉄兜の祖父にあたる。なお、伊予河野氏が自らの来歴を記した『予章記』という書では、その遠祖を孝霊天皇の皇子である伊予皇子（彦狭島命（ひこさしまのみこと））としており、鉄兜もこのことを誇りにしていたようである。

二、出発時期、および四国から大阪までの旅程

先に述べた通り、鉄兜は嘉永五年九月に林田を出発して伊予今治に渡り、翌嘉永六年三月に中国九州地方に向けて出発したとされる。そして翌年、安政元年十二月に林田に戻ったとされている。また、鉄兜が元治年間に書いたとされる随筆「掫瓢」には、「癸丑ノ九月」、つまり嘉永六年九月に豊後日田の広瀬淡窓[七]を訪れた記事があり、同年には九州に入っていたことになる。

しかし森銑三、徳田武の両氏は、鉄兜が淡窓を訪ねた時期は淡窓の日記『甲寅新暦』に記録があり、それによれば甲寅年、すなわち嘉永七年八月のことであると指摘している[八]。また徳田氏は、『甲寅新暦』嘉永七年十一月朔に鉄兜が再訪し、二十二日に辞去した記録があることも指摘している[九]。淡窓は病気などやむを得ない時を除いてはほぼ毎日日記を記しているので、記憶違いによる日付の間違いが起こる可能性は少なく、鉄兜の記憶違いの可能性が高い。さらに、嘉永七年三月に鉄兜が京都の頼三樹三郎[一〇]を訪ねていることから、鉄兜が関西を出発したのは嘉永七年二月末から三月初のこととする[一一]。徳田氏は、四国旅行については触れていないが、大阪から出発したのは嘉永七年のことであり、同年のうちに帰郷したことは間違いないだろう。とすれば、林田を出発したのはその前年、嘉永六年である可能性が出てくる。

この点について、『鉄兜遺稿』に収められた詩や、鉄兜と交流のあった文人たちの詩文から、さらに詳細に検討してみよう。

まず、林田から四国を経て大阪に至るまでの旅程について検討する。「河野鉄兜伝」では嘉永五年九月に林田を出発し、その年のうちに四国から大阪に渡り、大阪で年を越したとしている。この旅程について、『鉄兜遺稿』所収の詩や、鉄兜と交流のあった文人の詩から再構成してみる。林田を出発した鉄兜は、山陽道を西行して福山の藤江に至り、山路機谷[一二]を訪ねている。機谷には編年で編まれた遺稿集『白雪楼遺稿』があり、その巻三を見ると、「嘉永甲寅元旦書適」詩の次に「對潮樓呈秀野越先生」と題する詩二首があることから、嘉永甲寅、すなわち嘉永七年春の早い時期に、鉄兜は機谷を訪ねたことがわかる。以下にその一首を載せる。

對潮樓呈秀野越先生　対潮楼にて秀野越先生に呈す

豫雪讃烟相接宜　況将佳會荅佳時　豫雪　讃烟　相ひ接して宜し　況ふるに佳会もて佳時に答ふ
溪中情景思安道　月下推敲逢退之　溪中の情景　安道[三]を思ひ　月下に推敲して退之に逢ふ
松歴歳寒争晩節　梅迎春色促新詩　松は歳寒を歴て晩節を争ひ　梅は春色を迎へて新詩を促す
騒人不知邊防事　好纎鷗盟鬪酒巵　騒人　辺防の事を知らず　好く鷗盟を継ぎて酒巵を鬪はさん

〔大意〕対岸の伊予のあたりに雪が舞い、讃岐のほうには霞がたなびいて、それがよい感じに境を接している。まさに、我々がこのよき時によき集いを開くのにふさわしい。谷川の景色を詩に詠めば、戴逵の山水画が思い起こされ、月下に詩句を推敲していると、韓愈の逸話が思い出される。松は年の瀬の厳しい寒さを耐えて歳を越し、梅は春を迎えて詩想を興させる。攘夷だ開国だとみな騒いでいるが、その実だれも海防についてわかっていない。我々は先人を見習い騒がしい俗世を離れて、酒杯を巡らそうではないか。

嘉永七年春に藤江を訪れたということは、出発したのはその前年、嘉永六年である可能性が高くなる。「対潮楼」は藤江に近い鞆の浦にある福禅寺の客殿で、もとは海岸に石垣を積み上げた上に建てられていた（現在は周囲が埋め立てられ、海岸から隔たっている）。その座敷から瀬戸内海を一望でき、朝鮮通信使をもてなす迎賓館として使われた。「対潮楼」の名は、延享五年（一七四八）に通信使の洪啓禧が命名したものである。冒頭の「豫雪讃烟相接宜」や第五・六句の表現から、鉄兜は春の早い時期に藤江に来たと考えられる。また、ここで詠んだ詩に「福禅寺寓居　次棕隱翁韻而作」という題の詩があることから、鉄兜は鞆の浦ではこの福禅寺に宿泊したと考えられる。

藤江を訪れた時期だが、『鉄兜遺稿』巻下四十一葉表に載せる「甲寅元旦仙興」詩がその時期を示していると思われる。

甲寅元旦仙興　甲寅元旦　仙興

日映仙炊五色烟　微茫春水四無船　日　仙炊を映す　五色の烟　微茫たる春水　四もに船無し
蓬莱咫尺褰裳去　上壽玉皇香案前　蓬莱　咫尺　裳を褰して去らん　上壽せん　玉皇の香案の前

〔大意〕仙界から立ち上る五色の霞が、日に映える。もやがかかっている春の海、どこにも船の姿は見えない。ここから蓬莱はすぐ近くだ、衣

をかげて海を渡り、玉皇の祭壇に長寿を祝おう。

鞆の浦の東側に浮かぶ島々のうち、最も大きい島が仙酔島で、その南岸に五色岩がある[四]。「仙炊」「五色」はそれぞれ仙酔島と五色岩のことを指すと考えれば、この詩は鞆の浦で正月を迎えたことを詠ったものと解釈できる。そしてここ鞆の浦でしばらく過ごしてから、嘉永七年春の早い時期に、今治に渡ったのであろう。

今治で先祖河野家の遺蹤を探ったのち、鉄兜は讃岐に向かい、琴平榎井村の日柳燕石を訪ねる。その時期は、『鉄兜遺稿』巻上十三葉表に載せる「柳士煥呑象楼」詩、および燕石の遺稿集『呑象楼遺稿』竹集九葉裏に載せる「春夜拉越夢吉觀花於象山」詩から判断することができる。日柳燕石（一八一七～一八六八）、名は政章、字は士煥、燕石は号。榎井村の豪農の家に生まれ、幼少時から学問をよく修めた。侠気に富んだ人物でもあり、若い頃から遊侠し、博徒の顔役となる一方で、勤王派とも親交があった。一方で八歳から漢籍を学び始め、二十歳のときに『象山雑詞』を著すなど、詩文の素養も高い。鉄兜「柳士煥呑象楼」および燕石「春夜拉越夢吉觀花於象山」を見てみよう。

柳士煥呑象楼　柳士煥の呑象楼（どんぞうろう）

巴蛇呑巨象　三歳出其骨
主人取楼名　妙旨存髣髴
書牕萬卷讀　十年乃一發
吹枯艶春華　起伏健秋鶻
門外人不知　斥為當面物
問山山無語　白雲自出沒

〔大意〕中国の伝説上の大蛇、巴蛇は巨象をも呑み込むことができ、三年後にその骨を吐き出すという。「呑象楼」という名には、主人の深い考えがあるようだ。主人は年少時には書斎でひたすら読書にいそしみ、十年で立派な著書（『象山雑詞』のことか）をものした。美しい春の花は、季節が過ぎれば寒さに枯れてしまうが、そんな地上の盛衰にかかわりなく、鶻（はやぶさ）はひとり空を舞い飛んでいる。しかし他人はそんな主人の学識も智慧も知ろうとしない。窓から見える象頭山（ぞうずさん）に問いかけてみても、山は答えることはなく、白雲が出ては消えていくばかりである。

巴蛇（はじゃ）巨象を呑み　三歳にして其の骨を出す
主人　楼名に取りて　妙旨　髣髴として存す
書窓　万巻を読み　十年にしてすなわち一たび発す
吹き枯れたり艶やかなる春の華　起伏せり健やかなる秋の鶻（はやぶさ）
門外の人は知らず　斥（しりぞ）けて当面の物と為す
山に問ふも山は語るなく　白雲おのずから出没す

春夜拉越夢吉觀花於象山　春夜　越夢吉を拉きて花を象山に観る

歌楼人定夜無譁　春月在烟如隔紗　歌楼　人定　夜譁しき無く　春月　烟に在りて　紗に隔てらるるが如し

一刻千金不虛價　醉携才子見名花　一刻千金　価を虚しうせず　酔いて才子を携え　名花を見る

〔大意〕夜も更けて、盛り場もすっかり静まり返っている。春の月は薄雲の向こうに隠れて、紗で隔てられているよう。まさに一刻千金、この機を逃さず才子の鉄兜をつれて、象頭山の花を見に行こう。

「呑象楼」は榎井村の興泉寺近くにあった、燕石の別宅。金毘羅宮がある象頭山は、その西側にある。楼の二階で酒を飲むと、盃に象頭山が浮かぶところから、「象頭山を呑む」意気を込めて名付けられた。燕石は各地を遍歴した後、嘉永六年十二月末からこの楼に住むようになったので、鉄兜が燕石を訪ねたのはその後、嘉永七年春ということになる。この後、大阪に渡ったのであろう。

大阪では広瀬旭荘[一五]、柴秋邨[一六]に会い、京都では頼三樹三郎と交友を結ぶ。このとき秋邨および三樹三郎が贈った送序が『鉄兜遺稿附録』に収められている。秋邨の「送越君夢吉西征叙」（附録十五葉表）中に「今茲癸丑　夢吉将西遊　就舟於浪華」とあり、鉄兜が嘉永七年春に大阪に来たとすれば、「今茲癸丑」は嘉永七年の正月十三日または三月十四日のことになる[一七]。徳田氏の推測のごとく、鉄兜の大阪出立が二月末から三月初であれば、鉄兜が大阪に入ったのは正月十三日となる。

三、大阪からの旅程

大阪を出発して、鉄兜は一路西行し、嘉永七年五月ごろには備前に滞在したようである[一八]。その後は「河野鉄兜伝」によれば、高梁、江原を経て、再び藤江を訪れる。しかし高梁、江原訪問については、『鉄兜遺稿』所収の詩および鉄兜と交流のあった文人たちの詩文について検討すると、疑問が生じる。

まず高梁では山田方谷[一九]、三島中洲[二〇]、林富太郎、進昌一郎、板倉圭らと交流したとされるが、それを示すような詩は『鉄兜遺稿』には見えず、『山田方谷全集』にも鉄兜来訪に関する記事は見えない。また中洲は嘉永五年（一

八五二）から伊勢に行き、津藩の儒者、斎藤拙堂に師事しており、高梁に戻るのは安政三年（一八五六）三月で、鉄兜が高梁を訪れたとされる時期には、中洲は高梁にいなかったことになる。林富太郎、進昌一郎は方谷の門下生であり、鉄兜が彼らと交流した可能性はあるが、確証はない。

次の江原では江木鰐水[二二]、浜野箕山[二三]、阪谷朗廬[二三]らと交流したとされるが、ここでも少し問題がある。『鉄兜遺稿』には鰐水との交流を詠んだ「晉戈席上　同今村絲井岡本諸子賦」「送江木晉戈東役」の二首の詩が収められているが、少なくとも「送江木晉戈東役」詩は、鉄兜が江原を訪れたときに詠まれたものではない。なぜならば、鰐水は、『江木鰐水日記』下巻の年譜によれば、嘉永六年正月六日に、その年に来航するペリー艦隊[二四]への対応策協議のため、当時老中を務めていた福山藩主阿部正弘の命により、福山を発って江戸に向かっている。そして福山に戻るのは嘉永七年九月以降の事であり、鉄兜が訪れたであろう時期には鰐水は江原にはいなかった可能性が高いからである。「送江木晉戈東役」詩は、嘉永六年に鰐水が江戸に向かうのを見送ったときのものと考えられる。

送江木晉戈東役　江木晉戈の東役するを送る

祖帳風薫梅花下　發春六日日是馬　祖帳に風薫る梅花の下　発春六日　日々これ馬
長鞭東指函山雲　書生行色還瀟灑　長鞭東して函山[二五]の雲を指すも　書生の行色還つて瀟洒なり
公庭畫策負任重　胸中兵戟皆良冶　公庭にて策を画し　任の重きを負ふも　胸中の兵戟みな良冶なり
君不見昔日却金虞允文　果然大功出儒者　君見ずや昔日金を却せる虞允文[二六]を　果然として大功は儒者より出ずる

〔大意〕送別の宴に梅の花が香る。正月六日、晉戈（かなた）は江戸に向けて馬を急がせる。箱根の関を超える長旅なのに、あなたは泰然自若としている。幕府で異国船への対応を練るのは、責任まことに重大だが、あなたの胸中の武器がよい策を生み出すはず。かつて金の大軍を打ち破った虞允文の事績をご存じでしょう。やはり大きな功績は儒者によって建てられるのだ。

鉄兜が林田を発った時期を嘉永六年の遅い時期とすると、鰐水が福山を発ったときに鉄兜は林田にいたことになる。あるいはこの詩は、鰐水が江戸に向かう途上、林田に寄ったときのものかもしれない。無論、「河野鉄兜伝」に記す通り、鉄兜が嘉永五年九月に林田を発ったとすれば、福山で鰐水の出府を見送ることもできるが、その後嘉永七年初

に藤江を訪れるまでの鉄兜の足取りがわからなくなる。

ただ、江原を訪れたことは確かである。『鉄兜遺稿附録』に載せる阪谷朗廬の「送河野夢吉序」（十葉表）に、「嘉永甲寅夏　播磨越君夢吉　将西遊　訪余于江原興譲館」という句がある。「興譲館」は嘉永六年に建てられた郷校で、朗廬はその初代館長に就任している。鉄兜が嘉永七年夏に、江原を訪れたことは間違いない。

その後鉄兜は再び藤江を訪れる。機谷と再会して大いに詩を論じたようであり、『白雪楼遺稿』に「次秀野先生韻」（巻三）「送越秀野先生遊九州」（巻四）「芳灣消夏歌　同秀野河野先生、片村小川君賦」（同）など、このときに詠んだと思われる詩が収められている。「送越秀野先生遊九州」詩（「送越秀野先生遊鎮西」と改題して『鉄兜遺稿附録』にも載せる）は五言二百三十二句からなる長編古詩で、その第二百八、九句に「君今将遠行　閏月秋之七」とあり、鉄兜が閏七月に藤江を出発したことがわかる[二七]。

鉄兜はこののち松永に高橋西山を訪ねる。西山はその遺稿集『西山遺稿』に付された五十川訒堂（いそがわじんどう）の序によれば、名は寿介、字は子潔、西山は号。松永出身の医師、画家で詩歌にも長じていた。元治元年（一八六四）に行われた幕府の長州征討に、福山藩士の一員として参加している。『西山遺稿』には、甲辰年（弘化元年〔一八四三〕）に詠まれた「夏日書樓謾吟甲辰」詩から、甲戌年（明治七年〔一八七四〕）の「辭世」詩までを載せている。またその「辭世」詩に「五十九年吾已矣」とあることから、西山は文化十二年（一八一五）に生まれたと考えられる。

鉄兜は、嘉永七年の訪問よりかなり前、弘化三年（一八四六）に、すでに西山を訪ねているようである。『西山遺稿』に、丙午年（弘化三年）に詠んだ「河野鐵兜來訪賦贈族出伊豫皇子與我家同祖」詩を載せており、この時期が正しければ、鉄兜は弘化三年に西山を訪ねたことになる。また、「族出伊豫皇子與我家同祖」と割注があることから、西山の高橋家も伊予河野氏の後裔であることがわかる。鉄兜は先祖の遺蹤についての情報を求めて、西山を訪ねたのかもしれない。このとき鉄兜が詠んだと思われる詩として、『鉄兜遺稿』に「次子潔見贈韻」詩が見える。以下に西山「河野鐵兜來訪賦贈族出伊豫皇子與我家同祖」と鉄兜「次子潔見贈韻」を載せる。

河野鐵兜來訪賦贈族出伊豫皇子與我家同祖　河野鉄兜来訪し　賦して贈る〔族は伊豫皇子より出づ　我家と同祖なり〕

把酒閑窓情轉親　與君元是有深因　酒を閑窓に把（と）れば情転じて親し　君ともとは是れ深因あり

建棄幸已同清世　文字何妨共逸民　建棄　幸いにしてすでに清世を同じくす　文字何ぞともに逸民たるを妨げん
交際磨來千古氣　源流認得一家人　交際磨き来たれば千古の気　源流認め得たり　一家の人
疎燈細雨江湖夕　欲説南朝奈跡陳　疎燈細雨　江湖の夕　説かんと欲す　南朝　陳きを跡ぬるを奈せんと

〔大意〕静かな室内で酒を酌み交わせば、親しみがわいてくる。もともと鉄兜とは深い縁があるのだから。戦乱の世も遠く過ぎ去り、こうして詩文を唱和することができる。こうして詩文のやり取りをしていると、同祖であったことがよくわかる。雨がそぼ降る夕暮れ時、祖先の遺蹤を探すことについていろいろ述べたいと思う。

次子潔見贈韻　子潔に贈らるるの韻に次す

海南之望舊家親　晦跡山陽共有因　海南　之きて望む　旧家の親　山陽に晦跡せるは共に因あり
割據曾輕千乘國　棲遲竟托一塵民　割拠してかつて千乘の国を軽んじ　棲遲す　竟に一塵の民に托す
斗間劍氣當何地　天下文名屬幾人　斗間の劍気　何れの地にか当たる　天下の文名　幾人にか属す
落日煙波無限感　此情唯可對君陳　落日煙波　無限の感　此の情　唯だ君に対して陳べるべし

〔大意〕瀬戸内海の南、河野家の遺蹤がある伊予の地を、対岸からはるかに見やる。西山も鉄兜もこの山陽の地に隠れ住んでいるのは、先祖が亡ぼされたからだ。伊予に群雄が割拠していたころは、大国といえども恐れなかったが、今や一介の庶民として隠れ住むありさまだ。当時の戦いで振るわれた剣のきらめきは、どこへ行ってしまったのか。今の世に文名をとどろかせるのは、はたして何人いることか。夕暮れにけぶる波を眺めていると、限りない感傷があふれだす。この思い、西山にしか話せません。

「次子潔見贈韻」と題するとおり、鉄兜の詩は西山の詩の韻字「親」「因」「民」「人」「陳」を同じ順序で用いている。なお、鉄兜が西山を訪ねた時期については、『西山遺稿』十一葉裏に、西山のもとを訪れた文人たちの残した評が載せられており、その冒頭に「好處不必論、疵處不必忌、亦是知己盡言、五月二十六日　河野飛妄評」とあり、もしこの評が、鉄兜が西山を訪ねた時に書き渡されたものだとすれば、鉄兜は弘化三年五月二六日に西山を訪ねた可能性がある[八]。このときは実際に瀬戸内海を渡って遺蹤を探訪することはなかったようである。

松永から鉄兜はさらに山陽道を西に向かい、下関に至るが、『鉄兜遺稿』にはその間に詠まれたと思われる詩は見

えない。この区間で交流した人々のうち、玉乃世履[二九]の『五龍文抄』、塩谷簣山[三〇]の『簣山文鈔』、妙円寺月性[三一]の『清狂遺稿』を見る機会を得たが、鉄兜来訪に関する記事は見えない。ただ月性については、『鉄兜遺稿』に収める「士善歸自長崎　六首」（巻下四十一葉裏）の第二首で言及されている。

士善歸自長崎　六首（その二）　士善　長崎より帰る　六首（その二）

快活烟溪狂不狂　一篇得失説相當　烟溪に快活たり　狂せるか狂せざるか　一篇の得失　説くことあひ当たれり

石頭林下皆王土　我愛山僧策海防　石頭　林下　みな王土なり　我　山僧の海防を策するを愛す

〔大意〕霞たなびく渓谷に、清狂の僧、月性の楽しそうな声が響き渡る。たった一篇の文章が時宜にかなうかどうかで、ずいぶん議論したものだ。僧侶は山にこもって修行しているものだと思っていたが、月性は現状を鑑み、海防についていろいろ策を考えている。好ましいことだ。

「士善」は林田藩の人、村越充吉の字と思われる。村越充吉について、詳細は不明だが、鉄兜とは親しい間柄のようである。鉄兜の九州旅行と前後して、中国九州各地を旅行しており、鉄兜と同じく、各地の文人を訪ねている[三二]。ただ充吉が月性を訪ねたのは、『維新の先覚　月性の研究』所載の年譜によれば嘉永六年四月九日のことであり、鉄兜の来訪の前年のこととなる。しかしこの「士善歸自長崎」詩を見るかぎり、充吉が林田に戻るのは、鉄兜の林田帰郷の後のことと考えられる。充吉は帰途に月性のもとを再訪してから林田に戻り、その報告を聞いた鉄兜が、この詩を作ったのだろう。

下関から九州の小倉に渡ってからの鉄兜の旅程は、徳田氏が詳細に論じており、「河野鉄兜伝」の記述とも一致するので、ここでは詳述しない。鉄兜は秋から冬にかけて九州各地を巡り歩き、十一月二十日に小倉から船で下関に戻り[三三]、年末に林田に帰った。

四、結び

鉄兜は博覧強記の人であり、一度読んだ他人の詩を翌日そらんじてみせたり[三四]、行きつけの飲み屋で店主の代わり

に売掛の帳面をつけていたが、その飲み屋が火事で焼失し、帳面も失われたのを店主が嘆いていたところ、鉄兜が記憶を頼りに帳面を作り直し、集金に行かせたところ少しの違いもなかったという[三五]。しかし広瀬淡窓を訪ねた時期を間違えるような記憶違いをおこす場合もあるようで、本稿で検討した四国・中国旅行の日程についても、鉄兜の記録・記憶と、鉄兜と交流のあった文人たちの遺した詩文から再構成された旅程とは、食い違う部分が見える。鉄兜が記した『雲鶴日程』が現在見られない以上、これ以上の検討は難しいが、鉄兜の行動や交友について理解するうえで、鉄兜と交流のあった文人たちの遺した詩文やその他の資料を利用して、再検討を行うことにより、鉄兜の旅行についてより詳細な旅程を知ることができるだろう。

注

一　「河野鉄兜の中国・九州遊学の道筋について　―四国・備前・備中―」（『播磨の文化・文学の一側面―林田・敬業館にて―』、姫路獨協大学特別研究助成、二〇一一）。

二　その一端は二〇一二年度の本学市民講座「獨協講座」で、「河野鉄兜の旅」と題して公開した。

三　『播磨』第五十九号、一九六四。

四　『鉄兜遺稿』「例言」による。

五　一部の詩については、必ずしもこの旅行の時に詠まれたものとは限らない。

六　文化十年（一八一三）～慶応元年（一八六五）。笠岡敬業館初代教授の小寺清先の孫。清先の三男廉之の後を継いで嘉永元年より敬業館教授となる。『笠岡市史』に載せる小寺氏家系図に「完之、格兵衛、克襄等ト云フ」とあり、号を雲松という。笠岡敬業館は、代官早川八郎左衛門正紀が寛政十年（一七九八）に開設した郷校。嘉永三年（一八五〇）に経営不振に陥り、幕府からの助成が打ち切られ、小寺家に払い下げられて私塾となった。本文にあげた「笠岡訪小寺子先　不在」詩に見える「小寺子先」が完之のことかどうかわからないが、鉄兜が笠岡を訪ねたころに完之は笠岡敬業館の経営に当たっており、同じ「敬業館」の名を持つ学校の経営者との交流を求めた可能性はある。

七　天明二年（一七八二）～安政三年（一八五六）。名は建、字は廉卿・子基、通称は寅之助のちに求馬（もとめ）、淡窓は号。

豊後日田郡豆田町の生まれ。はじめ松田筑陰に学び、のち筑前の亀井南冥・昭陽に学ぶが、十九歳の時に病を患い帰郷。文化二年（一八〇五）に私塾桂林荘を開き、文化十四年（一八一七）には堀田村（現日田市淡窓町）に移転、咸宜園と命名した。全国から塾生が集まり、明治三十年（一八九七）に閉鎖されるまで、約四八〇〇人が学んだという。

八　日田郡教育会編『淡窓日記』所収の『甲寅新暦』巻二、八月七日の項に「河野俊藏來。宿筑後屋。」、同八日の項に「俊藏及其弟稱東馬來見。」とあり、同十二日に「河野俊藏辭去。」とある（一二六八頁）。森銑三「河野鉄兜」（中村幸彦ほか編『森銑三著作集』続編第二巻所収、中央公論社、一九九二）、徳田武「河野鉄兜の九州紀行」（『江戸風雅』第四号、二〇一一）を参照。

九　『甲寅新暦』巻二、十一月朔の項に「河野俊藏兄弟再來。以予有疾、留之筑後屋。」と、また二十二日の項に「河野俊藏辭去。」とある（前掲書一二七三～七四頁）。徳田氏前掲論文を参照。

一〇　文政八年（一八二五）～安政六年（一八五九）。名は醇、字は子厚・子春、三樹三郎は通称、また三木八とも。号は鴨崖。頼山陽の三男。後藤松陰、篠崎小竹に学び、江戸に出て昌平黌に入門。その後東北・蝦夷漫遊ののち嘉永二年（一八四九）に京都に戻り塾を開く。ペリー来航後は尊王攘夷を唱え国事に奔走。危険分子として安政五年（一八五八）に捕えられ、翌年処刑された。

一一　徳田氏前掲論文を参照。

一二　文化十四年（一八一七）～明治二年（一八六九）。名は重済・濟、字は伯美、号は機谷・三洲・疊碧。備後沼隈郡藤江村の豪農の家に生まれる。大阪に出て篠崎小竹に学ぶ。帰郷してから、自邸を「白雪楼」と名付け、江木鰐水、阪谷朗廬、菅茶山、藤井竹外、斎藤拙堂、広瀬旭荘、後藤松陰、篠崎小竹、高橋西山、河野鉄兜、頼三樹三郎、森田節斎など多数の文人を招き交流した。また社会福祉事業にも熱心に取り組み、藤江周辺の山道への休憩所設置、航海標識の設置、港の設置、井戸の掘削、銅鉱山の開発などを私費を投じて行った。著書は『白雪楼史記読本』、『白雪楼読史記考文』、『白雪梅』、詩集『未開牡丹詩』など。

一三　東晋の画家、戴逵（三二六～三九六）の字。

一四　感謝グループ制作「瀬戸内海国立公園　仙酔島」HP（http://www.tomonoura.co.jp/sen/）。感謝グループは中国地方で米穀・酒類販売、ホテル・観光業などを手掛ける企業グループ。

一五　文化四年（一八〇七）～文久三年（一八六三）。名は謙、通称は謙吉、字は吉甫、号は初め秋村、後に旭荘、梅墩。広瀬淡窓の弟。亀井昭陽、菅茶山らに学ぶ。天保七年（一八三六）に大阪に転居し塾を開いて教鞭を振るう一方、各地を遊歴して文人名流と交わった。

一六　天保元年（一八三〇）～明治四年（一八七一）。名は惟卯・萃、字は緑野、号は繭山、後に秋邨。徳島の出身。新居水竹に学ぶ。十六歳の時に上京し、大沼枕山・羽倉簡堂・広瀬旭荘に学ぶ。のち大阪で塾を開く。文久元年（一八六一）に徳島に戻り、思済塾を開く。

一七　日付の算定は内田和男『日本暦日原典』第四版（雄山閣出版、一九九二）によった。

一八　徳田氏前掲論文を参照。

一九　文化二年（一八〇五）～明治十年（一八七七）。名は球、通称は安五郎、方谷は号。備中松山藩の出身で、若くして藩校有終館の筆頭教授に抜擢された。のちには藩政にも参画し、破綻寸前だった藩の財政を立て直すことに成功して、「備中聖人」と称された。

二〇　文政十三年（一八三〇）～大正八年（一九一九）。名は毅、字は遠叔、中洲は号。方谷の弟子。津に遊学して斎藤拙堂に学び、二十八歳の時江戸に出て昌平黌に入る。のち松山藩に招かれ藩校有終館で教鞭をとる。明治初年に東京に転居、明治十年（一八七七）、東京に二松学舎を設立。

二一　文化七年（一八一〇）～明治十四年（一八八一）。名は戩（ゆき）、字は晋戈。安芸国豊田郡（現東広島市河内町）の出身で、二十一歳のとき上京して頼山陽の門に入る。山陽没後、江戸に出て昌平黌に入り、古賀侗庵に学ぶ。のち福山藩に戻り藩校弘道館教授となる。

二二　文政八年（一八二五）～大正五年（一九一六）。名は源吉、字は以寧、箕山は号。福山藩士の家に生まれ、若い時に津藩の藩校有造館に遊学、斉藤拙堂、土井贅牙らに学ぶ。嘉永元（一八四八）年には津から福山藩主阿部正弘に上書して藩校教育の革新を提言し、帰藩後は藩校弘道館、誠之館で教鞭をとった。

二三　文政五年（一八二二）～明治十四年（一八八一）。名は素、字は子絢、朗廬は号。備中国川上郡九名村（現岡山県井原市）に生まれ、六歳で父とともに大阪に移り、大塩平八郎に学ぶ。その後江戸に出て古賀侗庵に学ぶ。二十六歳の時帰郷して故郷にほど近い簗瀬村に私塾桜溪塾を開き、嘉永六年には西江原に設立された郷校興譲館の督学に任命された。

二四　ペリーの来航は嘉永六年六月だが、ペリーが来航することは、すでに前年のオランダ船からの風説書で幕府に知られていた。

二五　箱根のことか。明治二十七年（一八九四）刊行の松井鐙三郎編『函山誌　一名箱根土産』という本があり、箱根の別名として「函山」という表記があったようである。

二六　生年未詳～淳熙元年（一一七四）。南宋初期の中国の武将。字は彬甫。紹興三一年（一一六一）、金の海陵王率いる大軍を、采石磯（現安徽省馬鞍山市西部）で撃破した。

二七　徳田氏前掲論文を参照。

二八　『西山遺稿』は訒堂の序によれば、西山の死後しばらくしてから、息子の高橋圭介が編集して訒堂に序を依頼したものであり、収められた詩が必ずしも詠まれた順に載せられてない可能性がある。たとえば、「河野鐵兜來訪賦贈」詩の直後に載せる「送江木晋戈應召于江都邸時阿墨利加軍艦在神那川」（江木晋戈の江都の邸に召ぜらるに応ずを送る〔時阿墨利加軍艦神那川に在り〕）詩は、江木鰐水が江戸に向かうのを見送る詩であり、事実この弘化三年にはビッドル率いるアメリカ軍艦二隻が浦賀に来航している。しかし、『江木鰐水日記』を見る限りでは、この年に鰐水は出府していない。鰐水がアメリカ軍艦来航の件で江戸に向かうのは、前述したとおり嘉永六年のことである。「河野鐵兜來訪賦贈」の詠まれた時期、すなわち鉄兜が西山を訪れた時期についても、再検討する必要があるかもしれない。

二九　文政八年（一八二五）～明治十九年（一八八六）。通称は東平、泰吉郎、字は公素、号は五竜。岩国藩士桂修助の長男に生まれ、玉乃九華や二宮錦水に儒学を学ぶ。嘉永四年（一八五〇）に京都に遊学、翌年帰藩し、前年に亡くなっていた九華の後を継いで玉乃姓を名乗る。藩校養老館で教鞭を執る一方、洋学なども積極的に学び、普及に努めた。明治政府成立後、司法省に入って、初代大審院長に昇り、「今大岡」と称せられた。

三〇　文化九年（一八一二）～明治七年（一八七四）。名は誠、字は誠之、通称は量平のち修輔、簣山は号。医学を修め、のち松崎慊堂に儒学を学ぶ。天保十一年（一八四〇）、老中水野忠邦に登用され、文久三年（一八六三）には幕府儒官となる。著書に「簣山文鈔」「叢語」など。「河野鉄兜伝」で、岩国で交流したとされる「塩谷雲平」は、簣山の通称、量平の誤植と思われる。

三一　文化十四年（一八一七）～安政四年（一八五八）。遠崎村（現山口県柳井市遠崎）の妙円寺住職。九州・中国各地で漢詩文と仏教を学び、京阪・江戸・北越に遊学する。天保十四年（一八四三）、「人間到處有青山」句で有名な

「将東遊題壁」詩を詠む。嘉永元年（一八四八）に「清狂草堂」を開塾し、教育に努める。尊王攘夷、海防の必要を主張し、「海防僧」と呼ばれた。

三二　草場船山の『草場船山日記』嘉永七年五月十日の項に、充吉が来訪した記事が見える。また、佐賀蓮池の大村梁村の遺稿集『梁村遺稿』に「贈林田學士村越充吉字士善」と題する詩が収められており、士善が林田藩の村越充吉であることがわかる。

三三　「河野鉄兜伝」附録に、帰途小倉から村上仏山に宛てた書簡が収められており、その日付が「十一月廿日」となっている。ただし前述のとおり、淡窓『甲寅新暦』では十一月二十二日に日田を発ったことになっており、食い違いが生じている。

三四　太田淳軒『淳軒詩話』に見えるエピソード。徳田氏前掲論文を参照。

三五　内海青潮『詩人河野鉄兜』七ページ。

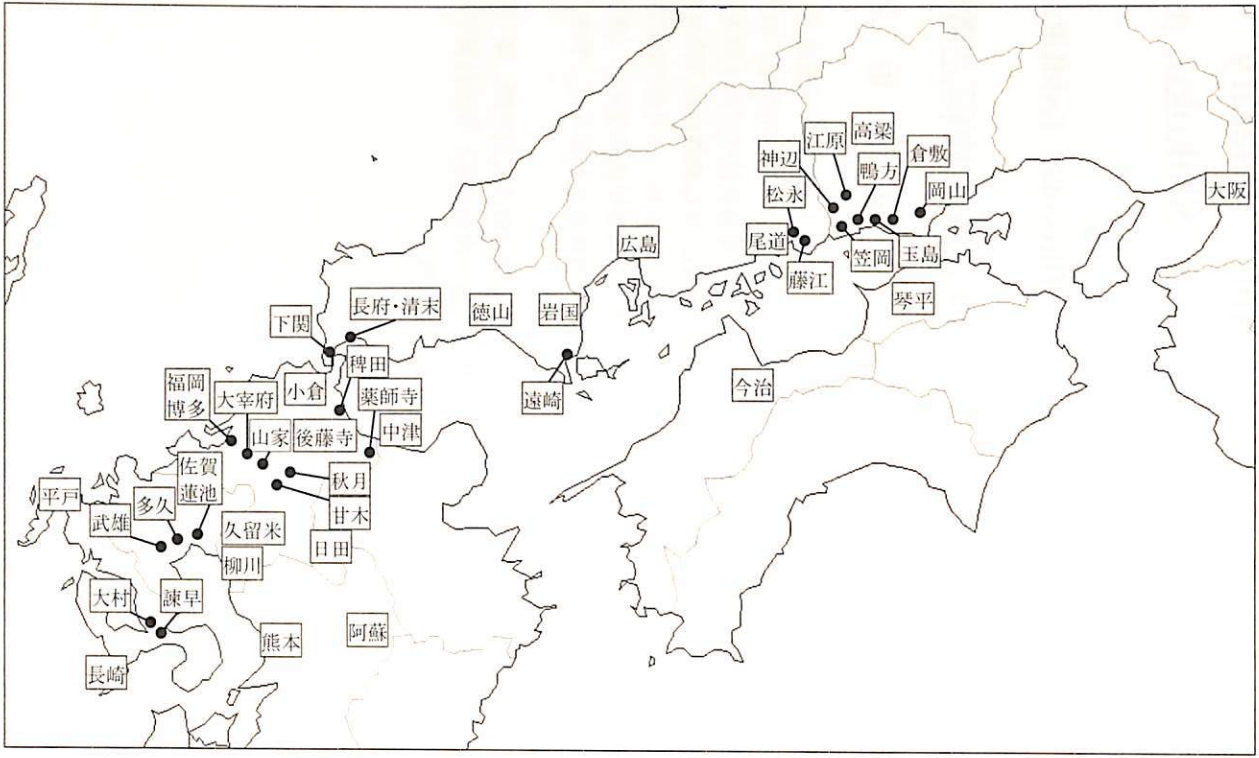
〔参考文献〕

河野天瑞「河野鉄兜伝」（西播史談会『播磨』第五十九号、一九六四）
森銑三「河野鉄兜」（中村幸彦ほか編『森銑三著作集』続編第二巻所収、一九七一）
徳田武「河野鉄兜の九州紀行」（江戸風雅の会『江戸風雅』第四号、二〇一一）
河野鉄兜著、河野天瑞編『鉄兜遺稿』（白鵬楼、一八九九）
高橋西山著、高橋圭介編『西山遺稿』（高橋圭介発行、宮永活版社印刷、一九〇〇）
河野鉄兜「振瓢」（元治年間、河野天瑞により「百家園」誌に一九〇三年二月～一九〇五年五月まで連載／森銑三・北側博邦編『続日本随筆大成』第三巻〔吉川弘文館、一九七九〕所収）
山路機谷『白雪楼遺稿』全四巻（手抄本、一九〇八年の跋あり）
大野梁村著、中野紹太郎編『梁村遺稿』（中野紹太郎、一九二三）

広瀬淡窓著、日田郡教育会編『淡窓日記』（『淡窓全集』中巻所収、日田郡教育会、一九二六）
内海青潮『詩人河野鉄兜』（龍吟社、一九三二）
山田方谷著、山田準編『山田方谷全集』全三巻（山田方谷全集刊行会、一九五一）
江木鰐水著、東京大学史料編纂所編『江木鰐水日記』上下（『大日本古記録』第六、岩波書店、一九五六）
福山市史編纂会編『福山市史』第二巻（福山市、一九六五）
立泉昭雄他『維新の先覚　月性の研究』（マツノ書店、一九七九）
笠岡市史編纂室編『笠岡市史』第二巻（笠岡市、一九八九）
内田和男『日本暦日原典』第四版（雄山閣出版、一九九二）
草場船山著、荒木見悟監修、三好嘉子校註『草場船山日記』（文献出版、一九九七）
川岡勉・西尾和美『伊予河野氏と中世瀬戸内世界　戦国時代の西国守護』（愛媛新聞社、二〇〇四）
石川忠久編『三島中洲詩全釈』第一巻（二松学舎、二〇一〇）

〔参考資料　鉄兜の四国・中国・九州旅行に関する年表〕

年月	「河野鉄兜伝」における旅程	本稿で再構成された旅程
嘉永五年九月	林田を出発、四国を巡り、大阪に渡る	
嘉永六年三月	大阪を発つ	
嘉永六年八月	下関に到着、小倉に渡る	
嘉永六年九月	日田の広瀬淡窓を訪ねる	
嘉永六年冬		林田を出発
年末		藤江に到着、年を越す
嘉永七年春		四国今治に渡り、先祖の遺蹤を探訪
		琴平、丸亀を訪問
正月十三日		大阪に渡る
三月初		大阪を発つ
五月		備前に滞在
夏		江原を訪問、藤江に向かう
閏七月		藤江を発ち、中国地方を西行して九州へ
八月		日田の広瀬淡窓を訪ねる
十一月		広瀬淡窓を再訪する
冬	小倉から下関に渡り帰路に就く	（十一月廿日）小倉から下関に渡り帰路に就く



鉄兜の四国・中国・九州旅行関係地図

A reconstruction of the itinerary of Tettou Kouno's journey in Shikoku and Chugoku Region

Hiroyuki TAMURA

关于河野铁兜的四国・中国地方游学旅程之考察

田 村 佑 之

河野铁兜是江户时代末期播磨地方的汉诗人。他的儿子河野天瑞曾经写一篇《河野铁兜传》，据说嘉永五年（1852）九月开始中国、九州地方游学。首先他到四国伊予地方的今治，此地是他祖籍，战国时代末期他的祖先受到丰臣秀吉的攻击而逃跑到中国地方各地。铁兜寻找祖籍的遗迹后，东行到讚岐地方的丸龟，然后过濑户内海到大阪。在大阪过嘉永六年（1853）的正月，三月份开始西行。过中国地方，八月到九州，至日田访问广濑淡窗。但据德田武教授等对《淡窗日记》详细调查，铁兜访问淡窗的时期不是嘉永六年而是嘉永七年九月。看来，铁兜出发游学的时期也可能是嘉永六年。

笔者对铁兜的遗稿集《铁兜遗稿》以及与铁兜交往的文人的书籍，如《淡窗日记》、日柳燕石的《呑象楼遗稿》、高桥西山的《西山遗稿》等进行调查，关于铁兜的四国、中国地方旅游时的旅程做出一些推测。